



たいしも通信

今回から新企画、下関の戦跡シリーズを始めます。戦跡という戦禍で失われた残骸・いわば負のイメージが先行しがちですが、戦争を生き抜いて後世に残ったものもあり、今回はその一つである興安丸について触れることとします。

◆岬之町の3つの錨

下関市岬之町には少なくとも3つの錨が展示されています。という、まずはアンカー広場にある錨を連想される方が多いと思いますが、今回は違います。因みにアンカー広場には2つの錨があり、一つは捕鯨船第二十五利丸のもの、もう一つの紫色の大きなものは実は謎で、「昭和18年3月」としか記述がありませんので今後の宿題とします。

さて、肝心の3つめが今回のお題、消防局前の歩道にある興安丸の錨です。興安丸は第二次世界大戦前から戦後高度成長期にかけて関釜連絡船、引き揚げ船、イスラム教巡礼船として使用されました。本来は鉄道省が関釜連絡船として建造した船(鉄道会社運営の意で鉄道車両を乗せるとは限らない)になります。

◆興安丸

興安丸は総トン数7,079トン、全長126.5m、旅客定員は1,746名で、満州建国による輸送力増強の必要性から関釜連絡船、金剛丸の姉妹船として1937年(昭和12年)に建造されました。関釜連絡船はその後需要拡大に伴い10隻にまで拡大しましたが、開戦後3隻が撃沈され、米軍の飢餓作戦に伴う機雷敷設でさらに3隻が沈没、残りは興安丸を含む4隻となり、興安丸は長門の奥深い須佐湾に避難し、無事ここで終戦を迎えています。

戦後、興安丸はGHQの日本商船管理局に移籍し、1945年から仙崎・博多・釜山間に就航、引揚げ船として活躍し仙崎漁港には記

念碑が今も残っています。1947年には天皇巡幸時の下関市での御宿泊所とされましたが、その翌年関釜連絡船は閉鎖、さらにその翌年に国鉄設立で興安丸も移籍、朝鮮郵船(後の東京郵船)→昭和郵船(へ)へ転移されました。

1950年からは朝鮮戦争に伴い米軍に傭船され、佐世保市・釜山の国連軍輸送に就航、朝鮮戦争終結後は政府の傭船により中華人民共和国の河北省秦皇岛・舞鶴間、ソビエト連邦ナホトカ・ホルムスク・舞鶴の引揚げ船として日本赤十字社の救護班を乗せて1957年(昭和32年)まで活躍し、舞鶴港の「岸壁の母」のモデルにもなっています。

引揚げ船として活躍後は何と海自へ空母への改装が検討されましたが実現せず、結局1957年東洋郵船に売却、そこで東京湾遊覧船として就航後、インドネシア等のイスラム教巡礼船やインドネシア国内航路に転用、この間1959年には北ベトナム・東京間の引揚げにも従事しました。その後、1970年(昭和45年)に解体のため売却、広島県で解体されて34年の生涯を終えました。強い保存運動がありましたが実現せず、錨の一つは広島県三原内港東公園に、錨のもう一つが下関市消防局前の歩道に、コンパスは下関市の火の山公園に、鐘が舞鶴市の舞鶴引揚げ記念館にそれぞれ今も保存されています。

▼編集後記▲

人に歴史ありと言いますが、船にも歴史ありで、興安丸を通じて、とかくタブー視されがちな日本近代史に少しでも触れる機会が得られたのは存外の成果であったと感じた次第です。ただしこれらを個人的・一過性なものにせず、後世にもしっかり伝える必要があるとも思いました。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあります。特に規則等に定めているもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。